

セッション「利己性・利己心の系譜学」

組織者 江頭進

近代経済学において長らく人は自己の欲求を可能な限り最大化できるように振る舞うことが想定されてきた。だが、近年の神経生理学、認知科学の発展、あるいはfMRI等の開発を通じて、これまでは見ることができなかった脳の働きなどを直接観察することが可能になり、その成果は経済学にこれまでの人間像の修正を促しつつある。それを受けて、行動経済学ではより制約の大きな限定合理性の概念を提出したり、制度が人間の意志決定に与える影響を再評価したりすることが重視したりしている。他方で、このような神経生理学や認知科学の結果は、従来から言われてきたように、人の脳には利己的行動や利他的行動を取る場合、あるいは他人の心情に「共感」する場合に、著しく反応する脳内部位の連結パターンがあることを示した。

だが、このような技術の発達により成果が上がる反面、「利己的」、「利他的」、「共感」あるいは「利己性」、「利己心」といった言葉が、いったい何を意味するのかという議論が抜け落ちているかのように思われる。現状において、これらの実験は実験器具の中に被験者を挿入し、単純化、象徴化された事象を見せることによって反応を調べるというという方法を採用しかない。だが、そこで測られた「利己性」が、われわれが社会で生活を営む上で発揮されているあるいは必要とされている利己心と直接繋がるかどうかはいまだに議論がなされていない。また行動経済学で行われる被験者実験も同様な問題を抱えている。

他方で、グローバリゼーションの進展とリーマンショック以降の世界的な景気後退を経て、一般的な意味での利己心の発揮として考えられていた現代資本主義に対して再検討が求められている。堂目卓夫著『アダム・スミス』が研究者を超えて一般の人々にも広く読まれたことはこのような背景があると考えられる。このように利己心の再検討は、経済学史研究者に、経済学および一般社会からの要請であると考えられるべきであろう。

本セッションの、第1報告（野原慎司）は「初期近代における利己心論の系譜」と題して、17世紀中葉以降のキリスト教的な利己心の捉え方に論究しつつ、アダム・スミスにおける利己心のあり方を捉え直す。第2報告（板井広明）は「ベンサムにおける利己心」と題して、功利主義における利己心の取り扱いを通して、それが後の経済人モデルへと接続する契機を探り、ベンサムにおいて利己心／利他心という二項対立や人間の内面性を問う視角そのものが棄却されている次第を明らかにする。第3報告（原谷直樹）は、「利他主義と利己心」と題して、現代経済哲学における利他主義に関する議論に着目し、利己心と利他主義および両者の関係の再定義を試みる。

本セッションでは、報告論文を起点として、「利己心」という言葉の持つ意味、社会性を問い直すことを目的としている。ここで採り上げられなかった経済学史上の人物との関係も議論されることを期待したい。